

死者は美化されるのか

——親密な他者の死の想像が性格評価に及ぼす影響

西 菜々子、白岩 祐子¹

概要

通常、死者が悪く言われることは少なく、むしろ称賛される傾向さえある²。誰かが亡くなったとき、周囲の人は、故人の生前の行いや性格のネガティブな側面を批判するよりは、その功績や性格のポジティブな側面を語ることが一般的ではないだろうか。著名人が亡くなったときにメディアが報じる追悼ニュースや、それを受けて人々が SNS などを通して発信するコメントに目を向けても、故人を褒めたたえる内容やいわゆる美談に終始している印象を受ける。

生きている人間と比較して死者がよりポジティブに評価される傾向は実証的にも検討されており、架空の人物ないし身近な人物をターゲットとするシナリオ実験 (Allison, Eylon, Beggan, & Bachelder, 2009, study1・2・4・5 : Hayes, 2016, study1・2) や、著名人の死亡前後の記事の比較 (Allison et al., 2009, study3) では、死後のほうが肯定的な評価を受けることが確認されている。この現象は死のポジティビティ・バイアス (death positivity bias) と呼ばれており (Allison & Eylon, 2005 : Allison et al., 2009)、なぜこれが生じるのかということについては、主として存在脅威管理理論、とりわけ存在論的恐怖という概念から解釈されてきた。

本稿ではまず、死のポジティビティ・バイアスの実例と関連する実証研

究をレビューし、存在脅威管理理論がどのようにしてこの現象を説明しうるか概観する。次に著者らが行った実証研究を報告し、親密な他者について、死を想定したときの方が、そうでないときより性格をポジティブに評価するのかどうか、またこうしたポジティブティ・バイアスの規定因として、死への恐怖や、「死者を悪く言うべきでない」という規範が持つ効果を検討する。最後に、死者をポジティブに評価することが、死別を経験した人々にとってどのような意味をもつのか考察し、今後の研究展望について議論する。

死のポジティブティ・バイアス

誰かが亡くなったとき、家族や友人など生前故人と関わりのあった人が、「あの子は優秀だった」、「あの人はとても親切にしてくれた」など故人を褒めるのを見聞きしたことがあるだろう。終末期患者とその家族に接することの多いホスピス医によると、生前は故人への不満を漏らしていた遺族であっても、亡くなると、「夫以上の男性はいません」、「素晴らしい母でした」など、故人の人の良さや良い思い出だけを語る傾向が見られるという（小島, 2017）。このように死者をポジティブに語る現象は、遺族など故人を深く知る人同士の私的なやりとりだけに見られる現象ではない。葬儀の弔辞では多くの場合、故人との別れを惜しむ言葉とともに、故人の美点や華々しい功績が語られる。また、メディアを通じて著名人の死去が伝えられたとき、SNSなどで発信される一般人の追悼コメントなどにも故人をポジティブに語る傾向が見いだされる。このように遺族の会話、葬送儀礼の場、自発的に発信するコメントなど、さまざまな個人的・社会的場面において死者をポジティブに語る傾向を見てとることができるだろう。

実証研究

実際問題として、死者は本当にポジティブに評価されやすいのだろうか。この点を実証的に検討した研究がいくつか存在する。そのひとつはシナリオ実験（場面想定法）によるものである。仕事上のリーダーを務める架空の人

物を描写し、その人物の生死のみを操作したうえで、当該人物に対する評価を比較した Allison, Eylon, Beggan, & Bachelder (2009, study1・2・4・5) によれば、生者条件と比較して、死者条件のリーダーはより好意的な印象を与え、また能力とカリスマ性もより高く評価された。Allison ら (study3) はさらに内容分析も行っている。具体的には、1990 年代に亡くなったスポーツ界や政界の著名人ら 8 名を選択し、各人物が亡くなる 5 年前から没後 5 年の間に書かれた 697 におよぶ雑誌記事を内容分析した結果、生前よりも死後の方が各人物をポジティブに評する記事が多く、ネガティブに評する記事は少ないことを見いだした。こうした傾向は死のポジティブティ・バイアスと呼ばれている (Allison & Eylon, 2005 : Allison et al., 2009)。

死のポジティブティ・バイアスは、リーダーや著名人など人々に強い影響力をもつ存在だけでなく、身近な他者に対しても生じることが報告されている (Hayes, 2016, study1・2)。Hayes もまたシナリオ実験 (場面想定法) を行い、参加者に身近な他者を一名挙げてもらったうえで、死者条件に割り当てられた参加者にのみ、その人物は亡くなっていると想像するよう求めた。さらに、その人物を第三者に紹介する説明文を書くよう求めるとともに、その人物に当てはまる性格特性を選択するよう全参加者に求めた。その結果、死者条件の人物は生者条件と比較して、より好意的に紹介され、よりポジティブな性格特性を付与された。こうした死のポジティブティ・バイアスは、参加者にとって親密な人物、好ましい人物だけでなく、疎遠な人物、嫌いな人物においても同様に確認されている。以上の結果が示唆しているのは、死者をポジティブに評価するという現象が、架空の人物、実在する著名人や親しい人にとどまらず、さまざまな他者について生起する普遍的な傾向だということである。同様の現象は、先述のとおり日本でも生起しうることが経験的に指摘されているが、これを実証的に検討することで本傾向がもつ普遍性、通文化性を明らかにすることができるだろう。

なぜ死者をポジティブに評価するのか

上記の研究は、死者がポジティブに評価される理由として、人々が顕在

的・潜在的に有している死への恐怖が関わっていると推測する。これは、後述する存在脅威管理理論に依拠して現象を解釈する試みであるが、もっとシンプルな解釈を加えることも可能であろう。すなわち、死者は生者のふるまいや発言を見聞きすることができる、という素朴な感覚にもとづく説明である。社会心理学には「被透視感 (sense of transparency)」という概念がある。これは、言語化していない自己の内面が他者に察知されている感覚をさす (太幡, 2006)。この概念を本稿の文脈で読み換えれば、自己の言動を死者、すなわち肉体的には存在していないはずの他者から把握されている感覚、と定義することができるだろう。

Allison et al. (2009) や Hayes (2016) が先の研究を行った米国において、事実、こうした「見られている」感覚と通底するあの世・靈魂観を抱く人々は少なくない。米国で行われた調査では、死後の世界を信じていると回答した人は 71% (Gallup & Castelli, 1989)、また死後生を信じていると回答した人も 70% にのぼることが報告されている (Idler et al., 2003)。日本においても一定数の人々が同様の感覚を保持している。たとえば 49% の人が死後の世界や「あの世」はあると思う、と回答し (朝日新聞, 2012)、また 46% から 49.2% の人が、人間は死んだ後も靈魂や魂が残ると思う、と回答している (朝日新聞, 2012 : 山本・堀江, 2016)。これらの調査結果が示しているのは、人間は死んだ後にも何らかの形で意識や存在が残る、と考える人が日本にも一定数存在することである。

死後も意識や靈魂は残るという感覚はさらに、「死者に見られている」という被透視感をもたらすだろう。配偶者を亡くして 2 年以上経過した人の 47% が、「故人は自分の近くにいるように感じる」と回答していることや、死別経験のある大学生の 27% が、「故人はあなたが間違っただけのふるまいや行動をせぬよう厳しく見守っているように感じる」という問いを肯定したという調査結果をふまえ、坂口 (2012) は、身近な故人が自分のそばにいて見守っている、と感じる人が一定数存在すると結論づけている。靈魂の想定と被透視感はさらに、死者を悪く言えば災いが降りかかるのではないか、との懸念を喚起するかもしれない。祟りという観念が日本人に存在することは従来か

ら指摘されてきた (e.g., 五来, 1994 : 鎌田, 2017 : 金児, 1997 : 川村, 2015 : 佐藤, 2008)。霊魂の存在を仮定する人であれば、被透視感と祟り・災いに對する恐れから、死者をポジティブに評価することを余儀なくされる可能性がある。死後生を信じる人がたとえ過半数に満たないとしても、これらの人々が死者をことさらポジティブに評価するならば、死者条件の人物評価 (平均値) は生者条件に比べて相対的にポジティブになるはずである。

そして、このような「見られている感覚」ゆえに死のポジティブティ・バイアスが生起するのだとすれば、同様のことは相手が生者であっても生起するだろう。すなわち、自分の評価やコメントが生きている相手の耳に入りうる状況では、そうでない状況よりもポジティブな評価が生じるはずであり、その程度は相手が死者である場合と同じくらいになるだろう。この点を検証するためには、Hayes (2016) が設定した生者・死者という 2 条件に加えて、生者条件にもうひとつ、参加者の評価が相手 (生者) の耳に入る公開条件を設定する必要がある。もし、従来の生者・非公開条件に比べて生者・公開条件と死者条件で対象人物がポジティブに評価され、なおかつ後者 2 条件で対象人物への評価と被透視感に差がなければ、ポジティブティ・バイアスは被透視感によってもたらされると結論づけることができるだろう。

死のポジティブティ・バイアスの理論的背景

—— 存在脅威管理理論 ——

存在脅威管理理論とは

すでに述べたように、先行研究では、死のポジティブティ・バイアスが生じる理由として存在脅威管理理論による解釈が行われてきた (Allison et al., 2009 : Hayes, 2016)。人間は、自分がいつか死ぬべき存在であるという死の不可避性を認識し恐怖を抱いている。存在脅威管理理論 (Terror Management Theory : Solomon, Greenberg, & Pyszczynski, 1991) とは、死の不可避性から生まれる恐怖が人間に大きな影響を与えており、こうした恐怖への防衛という

観点からさまざまな社会的行動を説明しようと主張する理論である（脇本, 2012）。人間はこの恐怖を緩和させるための心的機能として、「文化的世界観」と「自尊心」という二つの機能を保持していると考えられている（脇本, 2005）。このうち文化的世界観とは、ある文化内で共有された価値観や信念体系を意味しており、世界に意味や秩序をもたらし、その価値基準を満たすことで個人に直接的・象徴的な不死概念を提供する。たとえば文化的世界観のひとつに位置づけられる宗教は、それを信じる人々に「死後の世界」という直接的な不死概念を与えることで、死への恐怖を緩和する役目を果たしている（渡辺・唐沢, 2014）。

死のポジティブ・バイアスへの理論適用

存在脅威管理理論の想定によると、死への恐怖が高まると、自分の文化的世界観に価値や正当性があることを証明し、またそれらを防衛しようという欲求が強まる（脇本, 2005）。実際、実験の中で操作的に死への恐怖を高められた人は、自文化を批判するエッセイをより否定的に評価し、称賛するエッセイをより肯定的に評価することが確認されている（Greenberg, Pyszczynski, Solomon, Simon, & Breus, 1994）。こうした知見をふまえて、Allison et al. (2009) と Hayes (2016) は、他者の死を想起することで参加者自身の死への恐怖が喚起されたとき、これを低減しようとした結果、自らの文化的世界観を防衛するために死者の生前の行為を肯定する、つまり死者をポジティブに評価するのだと解釈している。

ただし、上記の想定は実際に検証されたわけではなく、現時点では仮説や解釈のひとつにとどまっている。そのため本研究では改めて、死への恐怖が死者に対するポジティブな評価の規定因であることを検証するため、「死への恐怖が強い人ほど死者をポジティブに評価する」との予測を検討する。

死のポジティビティ・バイアスの理論的背景

— 異なる観点から —

存在脅威管理理論適用の限界

存在脅威管理理論にもとづく解釈には限界もある。もし同理論によって死のポジティビティ・バイアスを説明しえたとしても、それは限定的な範囲にとどまるからである。前述のとおり、死のポジティビティ・バイアスは、親しい人だけでなく疎遠な人物や嫌いな人物に対しても生起することが確認されている (Hayes, 2016, study1・2)。嫌いな人物は自分の文化的世界観を脅かす存在であり、そうした相手をポジティブに評価することは、文化的世界観を守るよりはむしろ毀損する行為と言えるだろう。実際、Hayes (2016, study3) が行ったシナリオ実験 (場面想定法) では、親密な人物の死を想像する場合、その人物をポジティブに評価することで死の想起が減る一方で、嫌いな人物の死を想像する場合には、その人物をポジティブに評価した後でも死の想起は減らないという結果が得られている。死のポジティビティ・バイアスが嫌いな人物に対しても生じることが確認されている以上、死の恐怖以外の要因にも目を向ける必要がある。つまり、死の恐怖を緩和するという機能的側面とは別の要因についても検討することが重要であろう。

死者への非難を忌避する規範意識

死者へのポジティブな評価をもたらす別の要因のひとつとして、亡くなった人のことは否定的に言うべきではない、という規範意識の存在を挙げることができる。少なくとも日本では「死んだ人を悪く言うてはいけない」という暗黙の規範が存在しており、死者を批判するのは無慈悲であり不道德なことだ、という意識をもつ人は少なくないだろう。とくに葬送儀礼の場において、故人の悪口や非難、暴露話を避けることは礼儀作法として推奨されている (すび一ち工房, 2006; 藤村, 2011)。「死人に口なし」ということわざのとおり、反論や弁解の機会をもたない死者に一方的に悪口や批判を加えること

は、とくに不道徳な行為と見なされ忌避される傾向がある。死者への否定的な言及を避ける規範意識は、転じて死者への肯定的な言及を推奨することとも結びついている可能性がある。弔辞の内容分析を行った副田（2003）は、日本では死者に呼びかけるタイプの弔辞が多く、とくに死者に対する称賛や感謝の言葉を盛り込むことが既定路線になっていると指摘する。このような規範意識の存在を明らかにする試みはいまだ行われておらず、その意味でごく探索的な仮説ではあるものの、死者を否定的に評価するべきでない、という意識の強さは死者に対するポジティブな評価をもたらす、との予測が成り立つ可能性がある。

実証研究

—— 親密な他者の死の想像が性格評価に及ぼす影響 ——

本稿ではここまで、主として海外における死のポジティブティ・バイアス研究を概観してきた。前述のとおり、類似の現象は日本においても散見されるが、国内では実証研究が行われていないため改めて検討する必要がある。また死のポジティブティ・バイアスをどのような要因が規定しているのか詳細に検討することで、同現象の解明と理論の精緻化に貢献することができるだろう。本稿ではとりわけ、「死後も霊魂は残る」という信念にもとづいた被透視感と、存在脅威管理理論に依拠した死への恐怖、そして死者を否定的に評価することを忌避する規範意識がもつ効果に着目する。

ここからは著者らが行った実証研究の内容を報告する。本研究では、1) 日本でも死のポジティブティ・バイアスが生起するかどうかを検証するとともに、2) 死のポジティブティ・バイアスの規定因を明らかにするために、生者条件をひとつ追加して、自分の評価が生きている相手の耳に入りうる状況でも同様の現象が生起するか否かを明らかにし、3) 従来から想定されてきた規定因として「死への恐怖」を、また新たな観点として「死者への非難を忌避する規範意識」を導入し、これらが死者へのポジティブな評価に及ぼす効果を検討する。検討に際しては Hayes（2016）を踏襲し、シナリオ

実験（場面想定法）を採用する。

方法

参加者と実験手続きの流れ

2018年10月、東京大学を中心とする大学生82名（男性43名、女性39名）を対象に、「身近な人物に対する印象についての調査」と題した調査票を用いてシナリオ実験を行った。参加者の平均年齢は21.16歳（ $SD = 1.65$ ）であった。はじめに死者への非難を忌避する規範意識など個人特性を測定した。次に、参加者にとって最も親しい人物を一名挙げてもらったうえで、条件ごとに異なる教示文を提示し、特性形容詞尺度を用いてその人物に当てはまる性格特性を選んでもらった。各詳細は以下のとおりである。

死者への非難を忌避する規範意識

既存の尺度が存在しないため、独自に作成した「死んだ人のことを話す時は、その人の良いところを語るべきだと思う」、「死んだ人に対する悪口を言う人を見ると嫌な気持ちになる」を5件法（1：全くそう思わない、5：非常にそう思う）で尋ねた。

死への恐怖

丹下（1999）が作成した「死に対する態度尺度」の第一因子「死に対する恐怖」11項目（表1）を5件法（1：全くそう思わない、5：非常にそう思う）で尋ねた。

表1 死への恐怖の測定に用いた質問項目

-
1. 自分が消滅してしまうと思うと恐ろしい
 2. 自分が存在しなくなるのは嫌だ
 3. 私は死が怖い
 4. 死んだ後、何が起こるかかわからないので不安だ
 5. 自分の死を想像すると嫌な気分になる
 6. 死ぬといかなる体験も出来なくなるのが嫌だ
 7. 死ぬと人々に忘れられるのが嫌だ
 8. 死後自分の体に起こることが怖い
 9. 人が死ぬと、自分の死について考えさせられるのが嫌だ
 10. 身の整理がしたいから、突然の死は嫌だ
 11. 死によって自分の計画が未完成に終わるのは残念だ
-

親密な人物の想起

「あなたにとって最も親しい人物はどなたですか。1名挙げてください。下の回答欄に、あなたから見た続柄・関係をお書きください」というリード文を示し、最も親しい人物の想起・回答を求めた。

条件操作と特性形容詞尺度

「前問で挙げられた最も親しい人物について、以下の形容詞対がどれくらい当てはまるかを、1～7の中から選んで○をつけてください」というリード文を提示した。それに続けて「ただし、隣にその人物がいて、あなたの回答が本人に知られる（生者・公開条件）／ただし、近くにその人物はおらず、あなたの回答が本人に知られることはない（生者・非公開条件）／ただし、その人物が亡くなっている（死者条件）と仮定してお答えください」という教示を行った。

その後、林（1978）の特性形容詞尺度のうち、両極が明確なポジティブ性・ネガティブ性を帯びている形容詞対20項目（表2）を7件法（1：非

常に、2：かなり、3：やや、4：どちらともいえない、5：やや、6：かなり、7：非常に) で尋ねた。

表2 特性形容詞の測定に用いた質問項目 (左がポジティブ、右がネガティブ)

-
1. 積極的な — 消極的な
 2. 人のよい — 人の悪い
 3. なまいきでない — なまいきな
 4. ひとなつつこい — 近づきがたい
 5. かわいらしい — にくらしい
 6. 心のひろい — 心のせまい
 7. 社交的な — 非社交的な
 8. 責任感のある — 責任感のない
 9. 慎重な — 軽率な
 10. 恥ずかしがりの — 恥知らずの
 11. 重厚な — 軽薄な
 12. うきうきした — 沈んだ
 13. 堂々とした — 卑屈な
 14. 感じのよい — 感じの悪い
 15. 分別のある — 無分別な
 16. 親しみやすい — 親しみにくい
 17. 意欲的な — 無気力な
 18. 自信のある — 自信のない
 19. 気長な — 短気な
 20. 親切な — 不親切な
-

操作チェック

被透視感を測定するため「前問で挙げられた最も親しい人物に、自分の回答が知られていると、どのくらい想定しましたか」という項目を5件法(1:

全く想定しなかった、3：どちらともいえない、5：はっきりと想定した)で尋ねた。さらに、「前問で挙げられた最も親しい人物は、実際にご存命でいらっしゃいますか」という項目を尋ね(「1. はい」か「2. いいえ」を選択)、 「2. いいえ」を選択した1名を分析から除外した。これは、死者条件における個人差を排除するための手続きである。なお、前掲した参加者数は除外後のものとなっている。

倫理的配慮

死者条件での操作が、家族や友人など身近な人を亡くしたばかりの参加者に精神的苦痛を与える可能性があることから、該当者には回答を控えるよう注記した。具体的には、「この一年で身近な人を亡くされた方は回答をお控えください」という説明を調査票の表紙に明記した。また調査への協力は任意であり、不協力による不利益は生じない旨をあわせて記述した。実施に際しては所属機関による倫理審査を受け、その承認を得た。

結果

最も親しい人物として挙げられたのは、母親(33名)、友人・親友(27名)、恋人(11名)、兄弟姉妹(6名)、父親(5名)だった。死者への非難を忌避する規範意識2項目の相関係数は $r = .59$ ($p < .01$)、死に対する恐怖尺度11項目の信頼性係数(クロンバックの α 係数)は $\alpha = .86$ であった。両変数とも十分な内的整合性があることが示されたため、各項目の得点を合計し、項目数で除した平均値をそれぞれ算出した。また特性形容詞尺度については、各項目の尺度得点を逆転させたうえで同じ値を算出し、これを「性格のポジティブな評価」として用いた。

はじめに、操作が被透視感に及ぼす効果について検討した(操作チェック)。相手に自分の回答が知られていると想定した程度を従属変数、生者・公開条件、生者・非公開条件、死者条件の3条件を独立変数とする1要因3水準の分散分析を行った。その結果、有意な主効果が見られ($F(2, 78) = 13.54$,

$p < .01$)、Holm 法による多重比較を行ったところ、生者・公開条件の参加者は、他の 2 条件の参加者よりも、相手に自分の回答が知られていると想定していることが示された ($p < .01$, 図 1)。このことから生者 2 条件間における操作の有効性が確認された一方で、死者条件の参加者は、(想定上の) 死者に対する自分の評価は相手に見聞きされている、という被透視の感覚をもっていないことが示された。

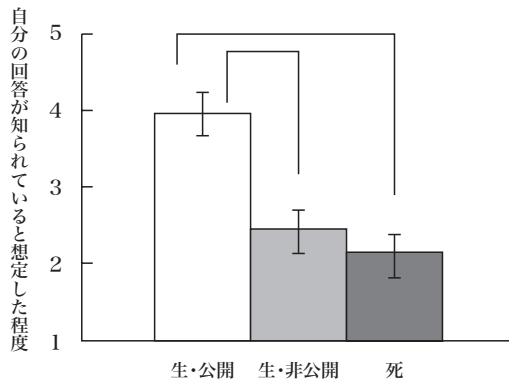


図 1 条件による効果

次に、操作が性格評価に及ぼす効果について検討した。性格のポジティブな評価を従属変数、3 条件を独立変数とする 1 要因 3 水準の分散分析を行った。その結果、主効果に有意傾向が見られ ($F(2, 79) = 2.65, p = .08$)、生者・公開条件の参加者 ($p = .08$) および死者条件の参加者 ($p < .05$) は生者・非公開条件の参加者よりも相手の性格をポジティブに評価する傾向が確認された (図 2)。つまり、死のポジティビティ・バイアスは確かに生じた一方で、生者・公開条件と死者条件の間では評価に差が見られなかった。先に示した予測のうち、生者・非公開条件に比べて生者・公開条件と死者条件で対象人物がポジティブに評価され、かつ後者 2 条件において差が認められないという予測は裏づけられたが、相手に自分の回答が知られていると想定する点

で後者2条件に差はない、というもう一方の予測は支持されない結果となった。このことから、死者条件において対象人物がポジティブに評価されるのは、被透視感とは別の要因によることが示唆された。

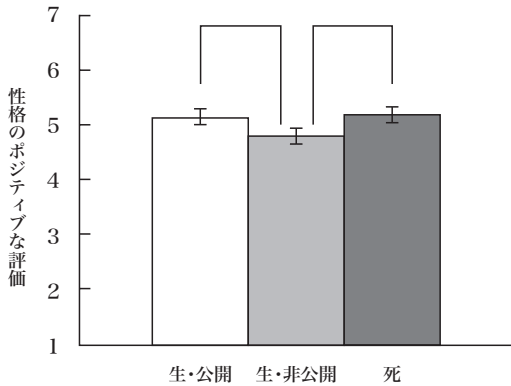


図2 条件による効果

死のポジティブバイアスをもたらしている別の要因を検討するため、「性格のポジティブな評価」を従属変数、「死者への非難を忌避する規範意識」と「死への恐怖」を独立変数、「性別」と「年齢」を統制変数とする重回帰分析を死者条件において行った（表3には残り2条件の同分析結果も付記した）。その結果、「死者への非難を忌避する規範意識」に正の効果が確認された ($p = .07$)。つまり、亡くなった人のことを悪く言うべきではない、という規範意識が強い人ほど、(想定上の) 死者の性格をポジティブに評価することが明らかになった。一方で「死への恐怖」による効果は見られなかった。すなわち、死への恐怖ゆえに、自らの文化的世界観を防衛しようとして死者をポジティブに評価する、という従来の仮説は支持されない結果となった。

表3 重回帰分析の結果：説明変数の標準回帰係数 (β)

	性格のポジティブな評価		
	生者・公開条件 (N = 23)	生者・非公開条件 (N = 27)	死者条件 (N = 30)
死者への非難を忌避する規範意識	.279	.145	.391 +
死への恐怖	-.058	-.006	.046
性別	-.062	.176	-.021
年齢	-.162	.006	-.078
R^2	.113	.058	.169
$adjR^2$	-.085	-.113	.036
* $p < .10$			N = 80

考察

—— 死のポジティブティ・バイアスと被透視感 ——

本研究において死のポジティブティ・バイアスが確認された。具体的には、家族や友人、恋人など最も親しい人を想起してもらい、さらにその人が亡くなっていると想像するよう求めた場合、生きてると想像するよう求めたときに比べ、相手の性格をよりポジティブに評価することが確認された。これは海外の先行研究と整合的な結果であり、死者をポジティブに語る傾向は、通文化性を有した普遍的な現象だと指摘することができるだろう。このことはまた、冒頭に示したいくつかの事例には一定の根拠があることを示唆している。本研究のように、実際には生存している他者の死をただ想像するだけで死のポジティブティ・バイアスが得られたことから、実際の死別に際してはこうした傾向がいつそう顕著となり、遺族らが故人の性格や生前の行いを好意的に語ったり、主として故人の良い面を想起したりする傾向は強まるものと考えられる。

本稿は、このように死者がポジティブに評価される要因として、わが国でも一定数の人々が死後の霊魂を信じているという知見をふまえ、「死者は生

者の言動を見聞きすることができる」という被透視感と、これにもとづく崇り・災いへの恐れに着目した。つまり、私たちが亡くなった人を称賛するのは、「自分たちのそうした言動を故人は見聞きしている」という感覚を保持しており、死者による災いを恐れるためではないかと予測し、その可否を検討した。実際、本研究が設定した生者条件のうち、「参加者の下した評価は相手の耳に入る」と教示した公開条件では、そうでない場合（生者・非公開条件）に比べ、相手の性格はよりポジティブに評価される結果となった。生者・公開条件での性格評価はさらに、「相手は亡くなっている」と想像するよう教示した死者条件と同程度に高いものであった。しかしながら死者条件は、当初予想していたほど高い被透視感を有していないこと、自分の評価が相手に知られていると認識していたのは生者・公開条件のみであることも明らかになった。ここから導き出されるのは、死のポジティブティ・バイアスが少なくとも被透視感によって規定されてはいないということであった。

考察

—— 死のポジティブティ・バイアスと死への恐怖・規範意識 ——

死のポジティブティ・バイアスの規定因として本研究は、これまで存在脅威管理理論にもとづいて想定されてきた「死への恐怖」という不可避の本能と、より文化的・社会的な所産と言うべき「死者への非難を忌避する規範意識」の二つを規定因として想定し、これらが死者へのポジティブな評価に及ぼす効果を検討した。

分析の結果、死への恐怖を感じていることと死者をポジティブに評価することとの関連性は確認されなかった。この結果が意味しているのは、日頃は意識されない死への恐怖が、身近な人の死に触れることで喚起され、自分が属している文化を価値づけようとして死者へのポジティブな評価をもたらす、という従来からの想定は裏づけをもたない可能性があることである。もちろん、本結果をもって、存在脅威管理理論による解釈可能性が完全に否定されたとは言えない。とくに近年の研究では、プライミング操作などにより閾下にお

いて死への恐怖が活性化されているとき、つまり本人は自覚していない状態で死への恐怖が喚起されているとき、文化的世界観の防衛反応は顕著になることが指摘されている（脇本, 2012）。したがって本結果から言及できるのは、少なくとも本人が自覚する死への恐怖は死のポジティブティ・バイアスと関連しない、との指摘にとどまるだろう。

一方で、「死んだ人を悪く言うべきでない」「死者は褒めるべき」という規範意識を強く持っている人ほど死者をポジティブに評価することが確認された。死のポジティブティ・バイアスはこれまで、死への恐怖とそれに伴う文化的世界観の防衛動機によってもたらされると仮定されてきたが、少なくとも本研究で明らかになったのは、そうした迂遠なプロセスの存在ではなく、死者との向き合い方について個人が保持している価値規範が規定因となっていることであった。本結果が示唆しているのは、故人を語るときの一種のマナーとして、死者のことさら良い面が言及されやすく、このことが死のポジティブティ・バイアスと呼ばれる現象の実体だということである。先行研究では、利害が対立していたり不仲だったり、必ずしも親密ではない他者への評価もまた、その死によってポジティブなものになることが報告されている（Hayes, 2016）。本結果で得られた価値規範による説明は、こうした関係性においても死のポジティブティ・バイアスが生じる理由を明らかにするものだろう。

以上の考察が含意する本研究の社会的・実践的な意義は、これまで弔辞における作法と考えられてきた現象を、死者を語る行為一般に拡張した点にある。弔辞、すなわち生者が死者に語りかける内容として選ばれるのは通常、死者の人柄や能力の優れた点への称賛・謝辞などのポジティブな側面に限られており、業績や性格上のネガティブな側面は捨象されるのが一般的である（副田, 2003）。本結果が明らかにしたのは、こうした作法や慣習が、弔辞という死者に呼びかける場面固有の特徴ではなく、生者が死者について語る局面全般に当てはまる可能性であろう。

本研究の限界と課題

本研究にはまたいくつかの限界や課題も残された。一点目は死への恐怖の測定方法に関する問題である。前記のように、存在脅威管理理論では近年、死への恐怖がさまざまな反応に及ぼす影響を検討した結果、本人が自覚する顕在的恐怖ではなく、本人が自覚しない潜在的恐怖こそが効果をもつことを明らかにしている（ただし、その理由は明らかになっていない）。本研究が測定したのは顕在的な死の恐怖であり、そのために効果をもたなかった可能性はなお残されている。今後は、参加者が自覚しない形で死への恐怖を測定し、その効果を検証することが必要だろう。

二点目は、被透視感の抽出における問題である。人々は、死後生信念や靈魂観にもとづいた被透視感、すなわち死者は生者のふるまいや発言を見聞きすることができる、という感覚をほとんど有していないことが本研究から示唆された。しかし、場面想定法を用いて、実際には生きている人物の死を想像するよう求めた本研究において高い被透視感が報告されなかったからといって、ただちにこの感覚の存在を否定することはできないはずである。実際、それまで靈魂の存在を否定する近代的・科学的な態度の保持者であることを自認していた副田（2003）は、親しかった故人に弔辞を捧げる局面を迎えたとき、自己の中に靈魂の存在を肯定する伝統的な死者観があることを見いだし、こうした死者観は多くの場合、無自覚なかたちで受容されている可能性があることを指摘している。今後は十分な倫理的配慮のうえで死別経験のある人々を対象とする研究を行い、故人に見守られている感覚が死のポジティブ・バイアスに及ぼす影響を改めて検討する必要があるだろう。

今後の展望

最後に、死者をポジティブに評価することが、死別を経験した人々にとってどのような意味を持つのか考察し、今後の展望について議論したい。

死者や死者との生前の関係をポジティブに評価することは、死別の苦痛の緩和につながる実証的・経験的にも指摘されている。具体的には、配偶者との死別後、夫婦関係をよりポジティブに評価することで、死別の苦痛は和らぐことが報告されている (Itzhar-Nabarro & Smoski, 2012)。また小此木 (2017) は、喪失対象が理想化されることで、物理的な関係性があったとき以上に、対象者は残された人の心の拠り所になることがある、と述べている。本研究が示唆しているのは、記憶自体が変容しその中で故人が理想化されるというよりは、故人を語るうえで美しい面・理想的な面がとくに語られやすいことであるが、そのような語りが繰り返される結果として、いつしか記憶そのものが変容していくこともありうるだろう。そのようにして生前よりポジティブな故人像を心に抱くことが、残された人々に安心感や慰めをもたらす一面は確かにあるように思われる。

一方で、死者をポジティブに評価することが不適応な死別反応と見なされる場合もある。若林 (2003) は、死者をポジティブに語ることが、本来は複雑な感情を遺族が表出する妨げになると指摘している。遺族の中には、死者を肯定したい気持ちだけでなく、怒りや理不尽など死者への否定的な気持ちが芽生えることもある。それにもかかわらず死者のポジティブな面だけを語ることになれば、死者へのネガティブな感情を表出しないまま保持していることが自責感につながることもあるという。

このように、故人をポジティブに語ることが死別を経験した人々に及ぼす意味は両面的である。この先、死のポジティブティ・バイアスのさらに先にある遺族の適応という問題を視野に入れるならば、故人との続柄 (立野・山勢・山勢, 2011) や関係性 (中里, 2006)、生前の葛藤の有無、死因 (宮林・安田, 2008)、故人の年齢といった、悲嘆に関わりがあると指摘されている各要因の効果もあわせて検討していくことが求められるだろう。同様に、死別からの経過時間もまた、死のポジティブティ・バイアスや遺族の適応に大きな影響を及ぼすと考えられることから、パネル調査などを通じて縦断的に検討していくことが今後の課題である。

「我々はなぜ死者をポジティブに語るのか」という問いに対する答えはひ

とつではないだろう。それは「死」という最大の不幸に見舞われた存在への慈愛・共感の発露であるかもしれない。残された人々への慰めや気遣いの表れ、という側面もあるだろう。また、生前必ずしも快く思っていなかった相手であったとしても、その死によって利害対立が解消し、負の感情を向ける必要のない無害な存在となり、その結果としてポジティブに語ることもあるかもしれない（小此木, 2017）。死者のことを悪く言うべきではない、という規範の効果を明らかにした本研究を端緒として、今後さまざまな観点からの検討が加えられることにより、死をめぐる作法と死生観への理解を深めることができるだろう。

■註

- 1 本稿は、第一筆者が2019年3月東京大学文学部に提出した卒業論文を改稿したものである。
- 2 もちろん例外もある。殺害された犯罪被害者や、紛争地帯で人質となり殺害された活動家やジャーナリストなどはしばしば批判的に評価されることがある。犯罪被害者が批判されるのは、人々が暗黙裡に抱いている善者必報の世界観（just world belief: Lerner, 1965）が脅威に晒され、これを維持するべく人々が被害者の行動に「原因」を求めるからであり、活動家らが批判されるのは主に、危険とされる場所へ自ら出向き、政府や行政をも巻き込んだ外交問題にまで発展させるからだと考えられる。本稿では、こうしたメディアが取り上げるような事件死ではなく、より一般的な自然死を検討する。

■引用文献

- Allison, S. T. & Eylon, D. (2005). The demise of leadership: Death positivity biases in posthumous impressions of leaders. *The psychology of leadership: New perspectives and research*, 295-317.
- Allison, S. T., Eylon, D., Beggan, J. K., & Bachelder, J. (2009). The demise of leadership: Positivity and negativity biases in evaluations of dead leaders. *The Leadership Quarterly*, 20, 115-129.

- 朝日新聞 (2012). 死生観：本社世論調査 朝日新聞
- 藤村 英和 (2011). 新版 葬儀・法要のあいさつ：すぐに使える事例付き 西東社
- Gallup, G. & Castelli, J. (1989). The people's religion: American faith in the 90's. Macmillan Publishing Company.
- 五来 重 (1994). 日本人の死生観 角川書店
- Greenberg, J., Pyszczynski, T., Solomon, S., Simon, L., & Breus, M. (1994). Role of consciousness and accessibility of death-related thoughts in mortality salience effects. *Journal of personality and social psychology*, 67, 627-637.
- 林 文俊 (1978). 〈資料〉対人認知構造の基本次元についての一考察. 名古屋大學教育學部紀要, 25, 233-247.
- Hayes, J. (2016). Praising the dead: On the motivational tendency and psychological function of eulogizing the deceased. *Motivation and Emotion*, 40, 375-388.
- Idler, E. L., Musick, M. A., Ellison, C. G., George, L. K., Krause, N., Ory, M. G., Pargament, K. I., Powell, L. H., Underwood, L. G., & Williams, D. R. (2003). Measuring multiple dimensions of religion and spirituality for health research: Conceptual background and findings from the 1998 General Social Survey. *Research on Aging*, 25, 327-365.
- Itzhar-Nabarro, Z. & Smoski, M. J. (2012). A review of theoretical and empirical perspectives on marital satisfaction and bereavement outcomes: Implications for working with older adults. *Clinical Gerontologist*, 35, 257-269.
- 鎌田 東二 (2017). 日本人は死んだらどこに行くのか PHP 研究所
- 金児 曉嗣 (1997). 日本人の宗教性：オカゲとタタリの社会心理学 新曜社
- 川村 邦光 (2015). 弔いの文化史：日本人の鎮魂の形 中公新書
- 小島 和子 (2017). 死んだ後に「悪口を言われる人」の共通点 PRESIDENT Online Retrieved from <https://president.jp/articles/-/22579> (2018 年 12 月 31 日)
- Lerner, M. J. (1965). Evaluation of performance as a function of performer's reward and attractiveness. *Journal of Personality and Social Psychology*, 1, 355-360.
- 宮林 幸江・安田 仁 (2008). 死因の相違が遺族の健康・抑うつ・悲嘆反応に及ぼす影響. 日本公衆衛生雑誌, 55, 139-146.
- 中里 和弘 (2006). 青年期における祖父母との死別に関する研究 (第 2 報)：死別反応とその関連要因 (性格特性、故人の生前の機能) についての検討. 生老病死の行動科学, 11,

21-29.

- 小此木 啓吾 (2017). 対象喪失 悲しむということ 中公新書
- 坂口 幸弘 (2012). 死別の悲しみに向き合う：グリーフケアとは何か 講談社
- 佐藤 弘夫 (2008). 死者のゆくえ 岩田書院
- すびーち工房 (2006). しっかり役立つ葬儀法要しきたり・あいさつ・手紙 法研
- 副田 義也 (2003). 死者に語る：弔辞の社会学 筑摩書房
- Solomon, S., Greenberg, J., & Pyszczynski, T. (1991). A terror management theory of social behavior: The psychological functions of self-esteem and cultural worldviews. *Advances in experimental social psychology*, 24, 93-159.
- 大幡 直也 (2006). 被透視感の強さを規定する要因：自己への注意と他者の視点取得についての検討. *社会心理学研究*, 22, 19-32.
- 丹下 智香子 (1999). 青年期における死に対する態度尺度の構成および妥当性・信頼性の検討. *心理学研究*, 70, 327-332.
- 立野 淳子・山勢 博彰・山勢 善江 (2011). 国内外における遺族研究の動向と今後の課題. *日本看護研究学会雑誌*, 34, 161-170.
- 若林 一美 (2003). 自殺した子どもの親たち 青弓社
- 脇本 竜太郎 (2005). 存在脅威管理理論の足跡と展望——文化内差・文化間差を組み込んだ包括的な理論化に向けて——. *実験社会心理学研究*, 44, 165-179.
- 脇本 竜太郎 (2012). 存在脅威管理理論への誘い：人は死の運命にいかにか立ち向かうのか サイエンス社
- 渡辺 匠・唐沢 かおり (2014). 死の脅威による人間の社会的行動の変化：集団への帰属意識を題材として. *死生学・応用倫理研究*, 19, 168-184.
- 山本 功・堀江 宗正 (2016). 自殺許容に関する調査報告：一般的信頼、宗教観・死生観との関係. *死生学・応用倫理研究*, 21, 34-82.

(にし・ななこ 東京大学文学部行動文化学科社会心理学専修課程卒)

(しらいわ・ゆうこ 東京大学大学院人文社会系研究科専任講師)

Is the Dead Idealized? : The Influence of the Assumption of Important Others' Death on Evaluation of Them

Nanako Nishi, Yuko Shiraiwa

It is not common for the deceased to be said badly. When someone dies, people around the dead rarely criticize his (or her) life-time behavior and personality. Instead, they generally talk about his (or her) past achievements and the positive aspects of the character.

This tendency of the deceased to be idealized and evaluated positively compared to living person has been empirically confirmed. Allison, Eylon, Beggan, & Bachelder (2009) gathered magazine articles on various famous leaders, and found that they had been evaluated positively after death compared to before death. This phenomenon is called “death positivity bias” and has been thought to be explained mainly by terror management theory.

In this paper, we first describe a few examples and past empirical studies of the idealization of dead, and outline the framework of terror management theory. Next, we report our study that examined whether people who imagined that their close person was dead positively evaluate his (or her) character than those who imagined he (or she) was alive. Furthermore, we examine the effect of fear of death and the norm that “we should not say bad things about the dead” as the cause of this positivity bias.

Finally, the influence of the idealization of the dead on the bereaved and the prospect of research of the idealization of the dead are discussed.